

「ひととかかわりあえる自立をめざして」

～すべての教科・領域に生きてはたらく生活科～

居澤 結美

今年度は～「吟味を生み出す対話」をつくる～（学校提案サブテーマ）のために、生活科を中心にした各教科の年間指導計画を作成した。なぜなら同じ学区でない子どもたちが「吟味を生み出す対話」に必要な共通理解・認識できる理由や根拠をより多く持つためである。生活科だけでなく、他教科との関連を図り、同じ経験・体験をする中で、様々な感じ方・捉え方が生まれ、対話を深めることができると考えたからだ。

また、「もの・こと」を通して、自立に必要な“ひと”とのかかわりを導き出すことをテーマに単元を構成した。このことで、子どもたちから“ひととかかわりたい”という思いを引き出すことができた。しかし今年度も子どもたちのつぶやきや気づきをどのように可視化しみるのか、が大きな課題となった。

キーワード：ひととかかわり、年間指導計画、単元計画、つぶやき・気づき、みとり方

1. ひととかかわりあえる自立をめざして

学校提案に、「ある対象について学び始める時にはその経験の少なさから根拠をもつことは難しいと考えられる。しかし、それまでの既有経験・既習内容と関連付け、その段階での理由や根拠をもつことはできる。そして、その理由や根拠をもちながら対話を進めることによって、吟味生まれるのである。」とある。「吟味を生み出す対話」のためには多くの既習の体験・経験が必要である。しかし、低学年、特に一年生は既有経験・既習内容が多いとはいえない。合わせて本校の子どもたちは学区がとても広く多岐にわたっている。これらのことから生活科だけで共通理解・認識を伴った体験・経験をしても少ない。そこで、すべての教科・領域と生活科がかかわりあえば、吟味を生み出すための、「理由や根拠」となる体験・経験をたくさん得られると考えた。学習指導要領ではおもに「国語科・音楽科・図画工作科」の合科的・関連的な指導を記しているが、本稿ではすべての教科・領域と生活科とがかかわりあって学習が進んでいくことで、子どもたちがたくさんの“理由や根拠”を得られ、吟味の手立てになると考えた。

また最終的な“自立”を「もっと人とかわりたい」と自ら思い、“ひととかかわりあい”につなげていくことに力点を置いて生活科を進めた。このために、“もの・こと”にどっぷりとひたるための時間が必要となる。しかし、生活科だけでその時間を設けるのは困難である。よって他教科・領域と合わせて、“ひととかかわりたい”という思い・願いが生まれる単元を構成していった。

2. “もの・こと”から“ひと”へ

“ひととかかわりたい”という思い・願いが生まれる単元構成にするために、単元の始まりは必ず“もの・

こと”から学習を進めてきた。

“もの・こと”にどっぷりとつかることということ、自分が興味・関心のある活動を十分に楽しむことである。3に記す「たのしいあそびあつまれ！」～あきをいっぱい楽しもう！～を例に挙げるとまず、たんけんで見付けてきたもので「おもちゃづくり」をしようという単元にした。そうすることで自分が気に入ったものができることと友だちに見せたい。次にゲーム性が加わればいっしょに遊びたい。そして、見せ合い、遊んでいく中で、「○○ちゃんのいいな、ぼくもやってみよう。」と思ったり「どうしたらそんなになるん教えて。」とやり取りしたりして、自分のおもちゃを再び作っていく。またゲームをしていけば「これもつこうしようよ。」「こうの方がおもしろいよ。」「こうしたら点入るようにしよう。」などかかわりあいの中でおもちゃの工夫と遊び方の工夫が生まれてくる。このように“もの・こと”にとっぷりとかかわれる教材を選び、“ひと”に向かえる単元を構成していった。

また作ったものを知らせるために国語、もっとお気に入りにするための技能を学ぶために図工やこの教材を用いて算数・道徳などさまざまな形で生活科を他教科・領域と関連付けて単元を進めていった。

3. 単元の実際

3. 1. 『はなあふたんけんたい』～あきたんけん～

春から「季節の変化と生活」として、自然豊かなを校内をたんけんしてきた。春はたくさんの草花を和みの時間に生けて飾ったり、しおりを作ったり、思い思いのものを作って遊んだ。また校内にある“おくやま”へみんなで淡竹を採りに出かけたり、桜の花がとてもきれいに咲き誇っている下で花びら拾いをしたりして楽しんだ。校外である和歌山城にも足を運んだ。夏も、同じようにして校内たんけんをした。桜の木に小さな

さくらんぼがついていて、びっくりしたり、赤く色づいたやまももを食べて「すっぱーい。けどおいしい。」と顔をしかめてたり、淡竹がすっかり竹になっていることに驚いたり、行きたびに春と比べその違いに気付いていた。

あきたんけんは、今年度、酷暑が続き夏からあきへの変化を感じられることが例年より遅かった。桜の葉もなかなか色づかず、代わりに渇水が原因で葉が緑のまま散ってしまっていた。けれど、気付きはあった。

「先生！みんな見て！ドングリ緑のいっぱいある！」

「ほんまや。ドングリ緑や！はじめて見た！」

「ドングリの種類で緑もあるんやね。らっきー。」

ドングリ拾いに出かけたものの、子どもたちの思うドングリはない。けれど見たこともない緑ドングリがある。これをうれしそうに拾っていたが、上を見上げると緑ドングリがたくさんあった。翌週同じ場所に行ってみると、「やったー。ドングリいっぱいある。すげー。緑ドングリなくなってるで。あれ？分かった。分かった。緑ドングリがかれて落ちてくるとちゃう。」

と一人の子が言うとみんな「なるほど」といった様子だった。その後子どもたちは黙々とドングリやまつぼっくりを拾っていた。帰りはほんのり色づく葉などを



写真1 夢中になってドングリを拾う子どもたち

見て夏とは異なる様子を肌で感じていたようだった。拾ってきたものは“あきあきBOX”にみんなで分けて入れた。その他にもカラスウリ、マツボックリ、ドングリ、ヨウシュウヤマゴボウ、落ち葉、クリとイガ、ツバキの実、アケビ、その他あきの木の実などなど、子どもたちが家の近くにあるあきを發表したりや教師が採ってきたあきを紹介したりしてあきを感じていた。

写真2

あきあき

BOXに拾ってきたあきがいっぱい！



3. 2. 『1ねんCぐみあきのおもちゃランド』

あきたんけんできたくさん集めたものを使って、一人

ひとりおもちゃを作ることにした。けん玉・コマは全員が作り方を学びながら作った。また、ゲストティーチャーを招いて工作をたくさん作ったりもした。その他、やじろべえ・マラカス・ヨーヨー・人形・ネックレス・時計などなど、一人ひとりが作りたいおもちゃを存分に作って遊んだ。初めの頃は、一人ひとりが作ることに没頭し、とても静かな教室であった。それが次第に、「ここってどうするん？」、「〇〇ちゃんのまねしよう！」と友だちの作るおもちゃを見て、まねたり、教え合ったりする姿が見られた。さらに時間がたつと、それぞれの作ったおもちゃで遊びだしていた。

コマやけん玉は、工夫カードに「みんなが作ったコマでしょうぶしたいです」と書いている子がいた。みんなに発表すると、喜んですぐ大会を開くことになった。ドングリごま大会の1回目、子どもたちは緊張しながら、「いくでー。」といい、一斉に回し始めた。けれど思ったよりすぐ回らなくなり、一番回った子のコマをみんなじいーっと見ていた。「なんでこんなに回らんのやろ…。」、「なにがちがうんかな。」と考え、「もしかして！」と言いながら、ドングリをマテバシイからクヌギに変えたり、その逆をしたり、つまようじの長さを変えたり、回し方を工夫したりと子どもたちは自然と話し合っていた。子どもたちは遊びの中でどんどん気付きを伝え合い深めていた。このように、たくさん時間をかけて、おもちゃを作って遊んでいると、子どもたちから、次の声が上がってきた。

「先生、もっと誰かと遊びたいな（見せたいな）。」そこで、子どもたちに、「みんなはだれに来てもらいたいのか？」と問いかけた。そうすると、“おうちの人・となりのクラスの子・学校にいる兄弟のクラスの人”が出た。しかし、どれも子どもたちの中にずっと落ちなかったようだが（この時間は5分くらい）、ある子が「ペアのお兄さんといっしょに遊びたい！」と言うと、「あー。私もそれがいーい！」、「ぼくも、ぼくも！」と、うなずきみんなととても喜んでいて。そして、一気にいっしょに遊びたい人は6年生のお兄さん・お姉さんという気持ちが高まっていった。それから、1Cのみんなのイメージはどんどん膨らみ、「今まで作ったので、どんなふうにおもちゃでお兄さん・お姉さんと遊びたい？」と聞くと、

「ドングリごま！」、「マツボックリのヨーヨー」、「やじろべえ！」、「マラカスでダンスして見てもらいたい！」、「けんだまで勝負したい！」

「けど自分のですもん？かんたんやで。」

「もう一個作りたい！」「難しいほうがいいで！」

「そしたら、自分はこれでお兄さん・お姉さんと遊びたい！というものを決めましょう。」

と聞くと、自分が今まで遊んでいて一番楽しいおもちゃの班に分かれていった。子どもたちはとてもうれしそうだった。そして、今までに作ったおもちゃで遊ぶのではなくもう一度新しく、6年生のお兄さん・お姉

さんが楽しめるものを作ろうということになった。子どもたちは『1Cあきのおもちゃランド』に向けてやる気満々になっていた。

今までは自分が楽しければよかったおもちゃづくりは、相手意識をもつことで“もっと〇〇なおもちゃづくり”へと変わっていった。この〇〇は、子どもたちがお兄さん・お姉さんと遊んでいる姿を思い浮かべながら「むずかしい・楽しい・おもしろい・やさしい・わくわくする・どきどきする・にっこり・にこにこ」など話し合いで考えたものである。

それぞれのおもちゃ班の工夫を挙げていく。

コマ班は、長く回りやすいコマを作ってから、画用紙にいくつか円を書きそこに点数をかいて、競う遊び方を考えた。

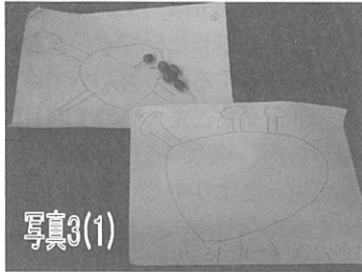


写真3(1)

回して遊んでいるうちに、自分たちのコマはよく回り、よく動くことに気付いたからである。さらに、大きな円は、なかなかみ出してしまうないので、レベル3まで作って、1から順にクリアしていく、というルールをつけたしていた。コマ班は、自分たちのコマで遊びながらどんどん対話し、遊び方を完成させていった。

マラカス班は、自分たちで作ったマラカスで“となりのトトロ”を演奏し、踊りもつけようと考えた。マラカスに入っている音が異なるように、容器や中に入れるものをそれぞれ変えていた。また、その違いが分かるように、ソロパートを用意していた。



写真3(2)

ヨーヨー班は、お兄さん・お姉さんの体が大きいことから、自分たちが遊んでいたものより長いものを作っていた。ゴムを長くする方法は国語科「大きなかぶ」の劇に使ったお面作りの時を思い出し、自分たちでしていた。また自分たちで遊んでいるときに長いほうが難しいと感じたそう、話し合いながら進めていた。またヨーヨーを、掌に当てて、遊ぶだけではなく、下にある的に当てるというゲーム性のある遊び方を考えていた。また、一つだけではなく、いくつもいくつもマツボックリをつなげたり、ドングリを付けたりして、どうすれば難しくなるかを、しっかりと考えていた。

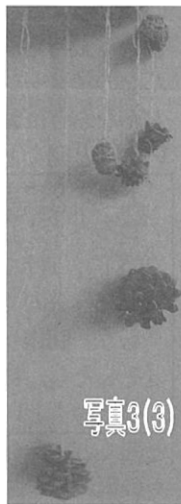


写真3(3)

けん玉班は初めに作ったものよりも、どんどん新しいものを作りだしていった。はじめは玉をマツボックリにしていたのだが、玉が小さいほうが難しいと遊んでいるうちに気付いたようで、ドングリも玉にしていた。また玉を結ぶひもを長くしたり、短くしたりして、どちらが難しいかを友だちと遊びながらやり比べていた。



写真3(4)

短いほうが簡単だと分かった、「お兄さん・お姉さんがするんやったら、長くしよ。」「けどよ。簡単なもの作ったとかんと、できんかったらいややん。そしたら、入ったところに点かいとこよ。そしたらええやん。点多いほうがええように。」「入ったと思ったら、実は穴開いてたらどう？びっくりするやろな。“うあ〜これどうなってるん”っておもしろがってくれるかもよ。」と遊び方・けん玉作りを工夫していった。

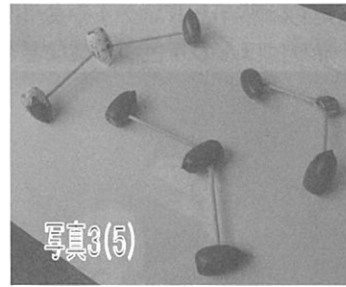


写真3(5)

やじろべえ班は、まずやじろべえを作ることに、苦戦していた。つり合いをとることが難しく、見たまま作ってみるのだが、釣り合わない。

すると、一人の男の子が、

「シーソーみたいにならなあかんから、おんなじじゃないとあかんのやよ。おなじドングリ探してくる。」「えー、どっちもマテバシイやで。おなじにしてる。」「そうじゃなくって、重さをいっしょにするん。持ってみていっしょかやってみよ。ほら。」

と気付いた。それから重さの同じくらいものやってみたがまだ釣り合わない。そこで、つまようじの長さを変えたり、そろえたり、ドングリに開ける穴の位置を試行錯誤してみたりと話し合い作っていた。そして、

「できた！やった！見て見て、やじろべえできたあ！」

とものすごくものすごうれしそうに知らせていた。それから、コツをつかんだのか、いくつもいくつも作っていった。作っていくと、ずっとバランスをとっているの、どのように遊ぶのかに頭を悩ませていた。そして、お兄さん・お姉さんの手は大きいので、すべての指に一つずつ10秒ごとに置いていってバランスをとるというルールにした。自分たちも楽しんで遊びながら、お兄さん・お姉さんはどう思うかを考えて、一生懸命作っていた。子どもたち同士で自分の作ったものをためすのだが、途中

「先生、試してみ。お兄さんとおんなじくらいやもん。」

とあって、さらに工夫をしていた。

おもちゃランドにお兄さん・お姉さんを招待した子どもたちはうれしくてたまらない様子で終始興奮していた。自分たちが一生懸命考えたおもちゃをお兄さん・お姉さんが楽しそうに遊んでくれる姿を見て、

「これね、ここは100点なんやで。」(けん玉)
「そうなんや。じゃここに入れたらいいの。」(けん玉)
「先生！先生！お兄ちゃんに難しいの作るって言ってたやろ。さっきね、お兄ちゃんがこのけん玉で遊んだ時、“めっちゃ難しくて、これすごいなあ”って言ってくれたんやで。大成功や！」(けん玉)
「あつ。お兄ちゃん、これめっちゃすぐできるから、新しいルール考えたで。これね、10秒から30秒に変える？バランスとるの難しいようにこちょこちょしちやおう。」「えー。こまるなあ。」(やじろべえ)
「先生！先生！お姉ちゃんにね、“めっちゃ上手”って言われたで。すごい、うれしいよ。」(マラカス)
「うあー、お兄ちゃんが新しいヨーヨーの仕方考えたんやで。めっちゃおもしろい。ぼくもやってみよ！」
「すげー。お兄さん、回すめっちゃ上手やな。まだ回ってる、さすがお兄ちゃんや。」(コマ)

などなど子どもたちはお兄さん・お姉さんとのかかわりの中で、新しい遊び方・新しいルールに気付きさらに工夫をしていた。そして、人とのかかわりの楽しさ・うれしさ・喜びなどを感じていた。

おもちゃランドが終わり、子どもたちから、

「もっとやりたい。」「またおもちゃ作って、誰かを呼んで！楽しいことしたいなあ。」という声が上がった。

このように、年間指導計画を立て、“もの・こと”から“ひと”につなげていくことで、自分たちで話し合い比べ、気付いていけたと考える。また生活科と他教科・領域を合わせることで、対話の中に“理由や根拠”となるものをたくさん出すことができ、深まりを生み出せたと考える。

4. 授業の考察

“ひととかかわりたい”という思い・願いが自発的に子どもたちから出てくることがこの単元の大きなねらい(テーマ)であった。そのために自然とかかわること・おもちゃ作りをすること(もの・ことにどっぷりとかかわること)から、“人とかかわり”という単元構成をしてきた。子どもたちは始め、おもちゃと主にかかわっている。それが“お兄さん・お姉さん”のために作るおもちゃという相手意識をもつと、工夫の視点が定まり、今までにはなかった考えが生まれている。また3. 授業の実際にもあるように今までは主に自分ひとりで考えていたのに、他者の考えを取り入れたり、意見を聞きたくなくなったりしている。そしてよりいいものを作ろうと、友だちと吟味をして活動を進めていた。さらに、自分たちが頭の中で考えていたお兄さん・お姉さんと遊ぶ姿を浮かべ作ったものが実際に使われ、「やっぱりこしよう。」とどんどん工夫を加え、

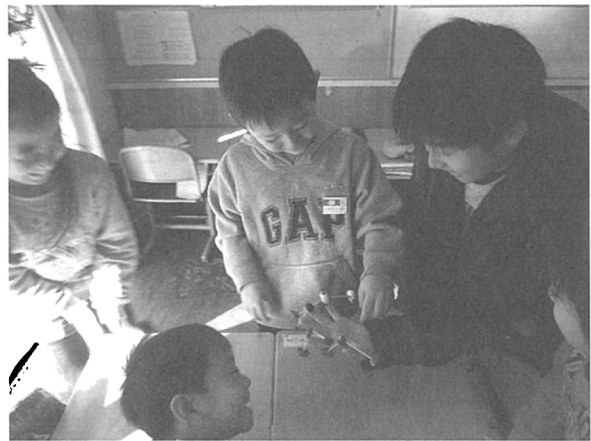


写真4 お兄さんとうれしそうにかかわる子どもたち

変えられていた。“ひととかかわりたい”という思いに“より〇〇(楽しく・おもしろくなど)”な思いが芽生えている。現状で満足するのではなく、常に考え、活動を進めていくことができています。また、自らその思いをうまく表現できなくとも、友だちの姿を見て、行動している。このように“かかわりあい”が新しい思い・願いを生み、次への意欲をもつための手立てにもなっている。

5. 成果と課題

もの・ことからひとへのかかわりを生み出すことは自然な流れだと考え、成果を生んでいると考える。そのために生活科だけを見て、単元を進めていくのではなく、他教科・領域とのかかわりを考えたことが大きな手立てとなっている。

しかし、昨年度の大きな課題“可視化”は、今年さらに大きな課題となった。昨年度、様々な表現活動や、ワークシートの工夫を挙げたが、今回初めて1年生を担当し、その難しさを痛感した。何かを表現するにしろ、書くにしろ、それ自体に多くの時間を費やしてしまい、本題からそれてしまうことが多くあった。単元構成で、子どもたちのつぶやき・気づきがとても必要なのにそれをなかなか捉えることができないのである。生活科で大切な“気づき・つぶやき”はまさに生もので、生まれた瞬間をとらえないと、あとで「書きましょう」「何かにあらわしましょう」といってももう出てこないことが多い。活動すべてに生まれる“気づき・つぶやき”は子どもたちの学びの過程である。これらを教師がきちんとみとることができるように、授業形態・進め方や、グループ分けそして単元構成などを考え、工夫していきたいと考える。

参考文献

・文部科学省 2009 小学校新学習指導要領解説 生活科
・秋田喜代美[編集] 2010

教師の言葉とコミュニケーション 教育開発研究所

・佐伯 胖 2010 小学館

「学び」を問いつづけて ～授業改革の原点～